

2023年11月 下関市立美術館開館40年 —財津永次 初代館長にきく



美術館が開館した頃

—その時代をふりかえって

1983年（昭和58年）、下関市立美術館が開館するに当たり初代の館長となられた財津永次先生。在任期間は2001年（平成13年）ご勇退まで在任期間は18年にわたりましたが、1922年（大正11年）11月、大阪市の出生まれて、下関市立美術館が40回目の開館記念日を迎える頃には101歳とされます。近年もご論文の発表など、「驚異の100歳」との呼び声ある財津先生に本年3月と6月の2回、下関市立美術館の草創の頃についてお話しいただきました。その際、自ら梗概もご執筆いただき、以下は梗概の内容をあわせ構成したものです。

梗概では冒頭「何事も忘却の彼方へ行ってしまった今日です」と前置きされつつも、「開館式当日は肌寒い日和で

した」と書き起こされています。そこで当時の新聞記事を見ながらのやりとりから紹介します。開館記念式典は一般公開初日の前日11月18日のことでした。（一）内編註

「オープンの際はすごかったね。地方の美術館のオープンに国立館の館長が3人も来てくれたからね。僕が文化庁にいた関係もあったんだけれど、それは鼻が高かった。東京国立近代美術館の安達さん（安達健二あだちけんじ1918～1999）、この人はその前に文化庁長官だった。京都国立近代美術館の河北館長（河北倫明かわきたみちあき1914～1995）は、美術館界の大御所……じつは遠縁にあたるんです。河北家は大きいえぼうちの一族です……それで河北先生は美術研究所（東京国立文化財研究所（現東京文化財研究所）の前身の国立博物館附属美術研究所）におられた時代からよく知ってるんです。河北先生のような人は今はいないね。何かあったら先生にお願いするとうまくまとめてくれるんですよ」

オープン当時のことをさらにとお尋ねすると、ハレの日のエピソードではなく開館記念展の準備について話を転じられます。

「オープン展の出品交渉、僕も行ったんだ。責任者として学芸員と一緒に。なりたててはやはやの学芸員が来たって駄目だよ。巻物の扱いひとつ出来ない。そしたら国立の館でも僕のことをよく知ってるからね。なんだ、財津さんが来たんならしょうがねえな、つてみんなオーケーで貸してくれた」

梗概でも重きをおかれていたのがこのことです。引用すれば、「学芸員の中には初任の者もあり、洋画と日本画との相異など大事な要領があることを伝え、材質の相違による取扱いの注意など若い学芸員への講習も忘れられない大事な仕事だった」。

財津先生といえば第二次世界大戦後の日本の文化財保護のあゆみを内側から知る証人です。大戦中は國學院大學在学中に学徒動員で戦地に赴き、終戦のち捕虜生活を経て復学。大学では道義学科に学び神職を志しましたが、転じて文部省に入られます。

「戦後もやっぱり神職になりたかったけれど神社本庁で神主は食えないと諭された。大学の人事から「文部省に国宝調査室というのがあるが、君、古い字に詳しいからどうだ」と紹介され、わけがわからないままそこに。その後、国宝調査室が、以前帝室博物館と改称された国立博物館の調査課となり、僕は一番若手で書の担当として勤めた。その頃は展覧会の題簽も筆で書きだつたから、ずいぶん書きましたね」

ここからご所属は、文化財保護委員会、文化庁と変遷し、文化財の調査と保護の最前線でのお仕事は30年あまりにわたります。



2023年6月30日福岡市のご自宅にて
右はご自筆の短冊「螢 つつめどもかくれぬものは夏虫の身よりあまれる思ひなりけり」(『後撰集』よりよみひとしらずの歌)

たります。そして転機が訪れ、1978年(昭和53年)4月、開館を翌年に控えた福岡市美術館に副館長として着任、地方での美術館運営という新たな道に。

「その時、剣木元文部大臣(剣木亨弘 けんのき・としひろ1901~1992)が、福岡の市長と友達だったんだ。市長が剣木さんを福岡の館長として引つ張ったんです。そうしたら剣木先生、誰か専門家と一緒にじゃないか、となつてね。それから一緒に行く奴じゃないか、となつてね。そして私が本籍が熊本だし、家内が亡くなつてやめになつていたのでちようどいい、つて指名された。じゃあ行くか、と東京から福岡に移つて市の職員に。国家公務員から地方公務員になつた。剣木先生が非常勤の館長で、私が常勤の副館長。実質館長だからいいだらつてね」

福岡市美術館開館の翌年1980年(昭和55年)には、下関市立美術館建設専門委員会の顧問となられ、いよいよ下関での美術館開館へ。福岡市美術館を1983年3月に定年退職されるとそのまま同年5月1日付で下関市立美術館館長に就任。就任間もない頃の『市報しものせき』のインタビューでは、美術館の「オーブン屋さん」とも称されたことが紹介されています。

ここで1970年代から80年代にかけての山口・九州地方での公立美術館開館の年次を整理しておくようにいたします。

- 1974年 北九州市立美術館(11月)
- 1976年 熊本県立美術館(3月)
- 1979年 福岡市美術館(4月)
- 山口県立美術館(10月)
- 1983年 佐賀県立美術館(10月)
- 下関市立美術館(11月)
- 1985年 鹿児島市立美術館(10月)
- 福岡県立美術館(10月)

地方に専門施設としての美術館が続々と生まれる時代となり、財津先生は将来の美術館人の育成という問題にも尽力されます。山口・九州地方でも大学で博物館学の講座が整備されていく頃のことについて。

「学芸員育成の講座が必要だということになつたけれどこの近辺に指導の経験者がいないわけですよ。ただ専門のない博物館学ってありえないよね。僕は書道史が専門でね、古文書の専門家としてやるということになつた。いろんな所から声がかかつて、九大からもあつたかな」

下関では1985年(昭和60年)から梅光女学院大学(現梅光学院大学)の文学部教授となり、博物館学を講じて20年にわたり教壇に立たれます。

「梅光の考古学の國分先生(國分直一 こくぶんおおいち1908~2005)に捕まつて、(博物館学の担当に)ちようどいいつて。また、学長の佐藤泰正先生(さとうやすまさ 1917~2015)の夫人が僕の姉と大阪の梅花女学校の同級生だったという縁もあつて、教授として呼ばれたんだ。そこで博物館学つてどうするか勉強して教えたんです。大学の先生方と一緒に考えて工夫しながらかたちにしていくつていうものでね。初めては初めてなんだけど何とかなるね」

インタビューもご在任当時、美術館で幾度か財津先生の抜き打ち小試験を受けた記憶がよみがえります。このたび先生にお会いして変わらぬ指導者としての意気に打たれました。まだまだお聞きすべきこと多々あり、今回採録出来なかったこともあわせ、機会を改めて続編を企画したいと考えます。

(編集:下関市立美術館岡本)



開館記念特別展「海・そのイメージと造形」展の様子。



開館記念式の日模様。列席者を先導する財津永次元館長。



下関市立美術館開館40周年に関連して、開館当初の様子を少し振り返りたいと思います。

市政90周年を迎えた下関市では、「市民の芸術的文化水準の向上のために、本市の特性を活かした美術館の建設を」という市民からの念願に応えるかたちで、記念事業の一環として市立美術館の建設が実現することとなりました。

1979年に下関市立美術館建設計画資料が作成されたのち、美術館建設工事は1982年4月4日に着工、1983年2月25日に竣工しました。

建設当時の躯体の打ちあがった様子からは、入口部分が張り出した美術館の形が見てとれます。美術館の駐車場の辺りには、家屋が立ち並んでいました。現在のスロープの着工前の様子も確認できます。

堀尾信夫 略歴

- 1943年 山口県下関市に生まれる
- 1967年 久留米大学卒業後、父卓司に師事
- 1971年 日本伝統工芸展に初入選（以降、入選41回）
- 1972年 西部工芸展受賞（以降、受賞2回）
- 1974年 日本工芸会山口支部入会
- 1975年 日本工芸会正会員となる
- 1980年 第1回下関市芸術文化振興奨励賞受賞
- 1981年 山口県立美術館にて「堀尾卓司・信夫」展
- 1983年 山口県芸術文化振興奨励賞受賞
- 1984年 日本工芸会山口支部展受賞（以降、受賞4回）
- 1995年 第1回エネルギー伝統文化賞受賞
- 1996年 下関市教育功労者表彰
- 1999年 伝統工芸諸工芸展 鑑査委員（以降、7回）
第46回日本伝統工芸展において日本工芸会奨励賞受賞（《無地研》）
- 2000年 第47回日本伝統工芸展 鑑査委員（以降、6回）
- 2002年 山口県指定無形文化財赤間硯保持者となる
- 2003年 下関市立美術館にて「硯司 堀尾信夫の世界」展
- 2008年 中国文化賞（中国新聞社）受賞
- 2009年 日本伝統工芸展において日本工芸会会長賞受賞（《横置楕円研》。2015年、国立近代美術館収蔵）
- 2014年 秋の叙勲において旭日双光章を受章
第62回日本伝統工芸展 第一次・第二次鑑査委員及び審査委員
- 2016年 第36回伝統文化ポラ賞 地域賞受賞



玉弘堂で。弟子の高原祐二氏(右)と

企画展の観覧受付が必要。
※①②④は参加無料ですが、
（約40分）
日時 9月16日（土）13時45分



作品画像(左上から)：《猿面研》1988年 作家蔵、《ふね研》1971年 下関市立美術館蔵、《楕円研》1994年 作家蔵(下関市立美術館寄託)、《無題》2020年 作家蔵

- ① 作家トーク
日時 9月9日（土）13時30分～（約1時間）
会場・定員 下関市立美術館講堂・50名
- ② 実演&赤間石「削り」体験
のみを使って赤間石を削ってみませんか？
日時 9月23日（土）10時～（約1時間半）
会場 下関市立美術館講堂
対象・定員 小学生以上の一般の方・10名
（9月13日までに要申し込み）
- ③ 実演&硯「磨き」体験
作家の手ほどきを受けて、
半製品のミニ硯を砥石で磨きます。
日時・会場 9月24日（日）10時～（約1時間半）
下関市立美術館講堂およびピロティ
対象・定員 小学生以上の一般の方・5名（9月13日までに要申し込み）
- ④ 開館40周年記念ギャラリートーク&コンサート
出演 藤田卓也（テノール歌手）
日時 9月16日（土）13時45分



赤間関硯

堀尾信夫の挑戦



企画展 & 所蔵品展 No.162
同時開催

9.5
10.15

休館日
月曜日（祝日の9月18日、10月9日は開館）
開館時間
9時30分～17時00分
（入館は16時30分まで）



作品画像(上から)
《変形十字文研「はやぶさ」》2019年、《長方双池研》2015年
いずれも作家蔵(下関市立美術館寄託)

下関を代表する伝統工芸として、長い歴史を誇る赤間関硯。堀尾信夫（1943～）は、その技を継承する硯作りの第一人者です。父・堀尾卓司（1910～1986）に師事して硯作りを学び、主に伝統工芸の分野で活躍を続けてきました。古典的な硯の制作を踏まえながらもそれに留まらず、柔らかさや温もりを感じさせる造形を身上に、近年も新境地を開拓しています。80歳を迎える今年、洗練された造形を求めて挑戦を続ける、その創作の軌跡をご紹介します。

赤間関硯は、赤間石と呼ばれる赤色頁岩を使って赤間関（下関の旧名）で作られる硯です。美しい石色と彫刻で知られ、古くから珍重されてきました。明治時代の中頃には、職人たちが「水に浮く硯」など自由で斬新な創作で腕を競い合ったといわれています。下関では現在、堀尾の玉弘堂のみが硯の制作を続けていますが、時代を経ても、自由な造形は健在です。堀尾信夫は長年、日本伝統工芸展をはじめとする展覧会で作品発表を続け、赤間関硯の芸術性に対する評価も高めてきました。

堀尾信夫の硯約50点を軸に、近世や近代の赤間関硯の名品や、堀尾の後進の作家たちによる創作も紹介。赤間関硯の歴史と未来を展覧します。展示室の一角で玉弘堂の工房を再現します。ぜひお楽しみに。

主任（学芸員） 渡邊祐子

企画展 観覧料 一般500円（400円） 大学生400円（320円） ※（内は平日料金）
※18歳以下の方および高等学校・中等教育学校・特別支援学校に在学の方には無料。 ※下関市内在住の65歳以上の方は半額
主催：下関市立美術館 助成：エネルギー文化・スポーツ財団
所蔵品展 No.162 観覧料 一般210円 大学生100円

所蔵品展 No.162 特集

植木茂と

下関市立美術館

01 建築、温故知新

今年開館40周年を迎える下関市立美術館。この度の所蔵品展は少し趣向を変えて、美術館

の「建物」に注目します。特徴的な吹抜けの空間「光庭」誕生の舞台裏、なぜ入口までの長いスロープがあるのか、エジプトの神殿やヨーロッパの修道院との関係とは…。図面や写真を交えて、建築や敷地内の修景デザインに込められた意図を紐解きます。



建設中の美術館

02 彫刻家 植木茂 (1913-1984)

抽象彫刻のパイオニアとして知られた植木茂は、戦後間もない1947年から51年を、妻文子の出身地下関で過ごしました。下関時代には、下関市民館(当時)の外壁レリーフの制作や、下関美術家協会の設立メンバーに名を連ねるなどの足跡を残しています。その後大阪に拠点を移し、サントリのウイスキー「ローヤル」のボトルの原型をデザインするなど、商業デザインの仕事で



アトリエの植木茂(1950年代と推定)

も知られました。下関市立美術館の開館にあたり修景デザインの顧問を務めた植木の彫刻作品およそ20点を、洋画家でサントリの宣伝部長でもあった山崎隆夫、硯作家堀尾卓司ら同時代の芸術家たちの作品とともに紹介します。



植木茂《モード》1949年

03 藤田嗣治 素描

大正2年（1913年）に渡仏した画家、藤田嗣治（1886～1968）。日本画の墨や

筆を使った独自の画風はパリで高く評価され、一躍時代の寵児となりました。貴重な1920～30年代の素描作品から、藤田が得意とした女性や猫、子どもを描いた約20点をご紹介します。

主任（学芸員） 渡邊祐子

美術館・建築さんぽ

美術館の設計を手掛けた元下関市職員をゲストに迎え、建物の魅力を発見するツアーです。

日時 9月18日（月・祝）13時30分～（約1時間）

講師 藤永眞善美氏（元下関市職員 二級建築士）

会場 美術館内および敷地内（雨天の場合変更あり）

※参加は無料ですが、所蔵品展の観覧受付が必要。



開館40周年記念特別展 アニメーション「美術の創造者」 新・山本二三展

天空の城ラピュタ、火垂るの墓、
もののけ姫、時をかける少女

期
11/19(SUN) → 1/21(SUN)
2023 → 2024

休館日：月曜日(祝日の1月8日は開館)
年末年始(12月28日～1月1日)

観覧料：一般 1,400円 (1,200円)
大学生 1,200円 (1,000円)
※()内は平日料金。
18歳以下の方、高等学校、中等
教育学校、特別支援学校に在学の
生徒は無料。下関市内在住の65
歳以上の方は半額。

主催：下関市立美術館、読売新聞社、
KRY山口放送
力：絵映舎、日東電工
企画協賛：山口県芸術文化振興会 2023
BOAT RACE 下関
公益財団法人下関市文化振興財団

「天空の城ラピュタ」「火垂るの墓」「時をかける少女」「もののけ姫」など、誰もが知る名作アニメーションの背景画を手がけた山本二三。本展では、山本がこれまでに手がけてきた初期から最新作までの背景画のほか、制作の過程で生み出される未公開のイメージボードや、制作用具など約220点を一堂に展覧します。

第1章 冒険の舞台

山本が弱冠24歳で初の美術監督をつとめた「未来少年コナン」や、飛行石と空に浮かぶ伝説の島をめ



ルパン三世PART2《アルパトロス、翔ぶ》部分図 1980年
原作：モンキーパンチ ©TMS



時をかける少女《分かれ道》2006年
©「時をかける少女」製作委員会 2006

ぐる「天空の城ラピュタ」など、主人公がめぐる冒険の舞台となる世界をお楽しみください。
第2章 そこにある暮らし
戦争がテーマとなった「火垂るの墓」や、タイムリープの能力をもつ少女の物語「時をかける少女」といった、暮らしの息遣いを感じさせる街や家屋などの表現をご紹介します。

第3章 雲は語る

季節や天候によって、さまざまな形に姿を変える雲。その一瞬をとらえた描写は「二三雲」と呼ばれ、山本の代名詞ともなりました。本章では彼の魅力的な雲の描写に注目します。



五島百景《奈良尾神社のアコウの樹(中通島)》2017年
©山本二三

第4章 森の命
自然と人間の関係がテーマである「もののけ姫」。山本は「シン神の森」の世界を表現するために、鹿児島の屋久島へ取材に出かけ、古代の神々がすまうような、観る者に迫りくる空間を表現しました。「もののけ姫」をはじめとした、森の生命を感じさせる瑞々しい描写をご紹介します。

第5章 忘れがたき故郷

山本の出身地である五島列島を描いた「五島百景」は、2010年からライフワークとしてはじまり、約10年をかけて完成しました。アニメーションの背景画を50年描いてきた山本の技術と、故郷への想いが込められた、美しい風景の数々をご紹介します。
(学芸員 藪田淳子)

*下関市立美術館は2023年11月19日に開館40周年を迎えます。これを記念して、新・山本二三展では様々なイベントを予定しています。

下関市文化振興財団との共催によるプレイイベント

・新・山本二三展とアニメーション美術の解説会

2023年9月17日(日) 14時～15時

ドリームシップ3階 視聴覚室

(下関市細江町3丁目1-1)

・コンサートから展覧会へのいざない

2023年9月30日(土) 14時～約1時間半

下関市民会館 中ホール

(下関市竹崎町4丁目5-1)

東亜大学との連携による会期中イベント

・トークイベント「アニメーションについて語る」

2023年12月 Zoomにて開催予定

その他多数のイベントを企画中！

※詳しくは美術館ホームページか、二次元コードからご確認ください。



展覧会予告

悲母観音からはじまる物語

下関ゆかりの画家・狩野芳崖(1828-1888)の《悲母観音》(1888年、東京芸術大学美術館蔵、重要文化財)は、彼の代表作であり、彼が最期に手がけた作品です。本作品を起点とした「いま」に至るその広がりを見つめる特別展を、来年二月に企画しています。

今もなお多くの人の心を惹きつけてやまない《悲母観音》は、その制作の直後より、多くの横作類似作が作られ続けています。これは後進に本作品が共感または感動を与えたからだけではなく、美術史のなかで担ってきた役割にも依るところがあるゆえでしょう。東京美術学校の開校直前に完成となる予定であった本作には、東京美術学校ひいては近代日本画の理念や理想、教育的模範など諸要素が期待されていたのではないのでしょうか。記念切手等にもなり一般に広く知られている悲母観音のイメージは、近代日本画の幕開けという記念碑的な要素のみならず、日本の近代の幕開けそのものをも示すイメージとして成立しているように思います。

このたびの展覧会では、《悲母観音》、《悲母観音下図》が15年ぶりに来関するほか、山田敬中や菱田春草にみる東京美術学校での制作作品、そして芳崖四天王・岡倉秋水による悲母観音や、同・高屋肖哲の悲母観音研究、さらに秋水による狩野芳崖作品の模写などをご紹介します。《悲母観音》の模倣作やインスピレーションを受けた作品たちを通して、改めて芳崖の近現代美術への影響について考えます。(S)

展覧会のみどころ

(1) 激レア! 悲母観音の綴織額

第4回内国勸業博覧会に出品された二代川島甚兵衛《悲母観音綴織額》(右図)は、博覧会会場で明治天皇によりお買い上げとなった作品です。このたび下関に初上陸します。元祖《悲母観音》と共に必見です!

(2) いろいろな悲母観音

悲母観音の模写、発展させた作品、イメージソースとしての悲母観音など、さまざまな悲母観音を是非会場で見比べてください。

(3) 弟子たちの芳崖研究

芳崖の弟子であった岡倉秋水と高屋肖哲の事績を中心に、狩野芳崖の作品研究や顕彰活動をご紹介します。また弟子による現在所在不明の芳崖作品の模写作品も初展示の予定です。

(4) 芳崖に影響を受けた現代作家たち

四宮義俊(1980-)の「ソツキ」シリーズ、坂本英駿(1988-)の孔雀の作品群、全く異なるスタイルの現代日本画ですが、そのどちらもが芳崖あるいは芳崖の作品からの影響や着想されたもの。多彩多様な芳崖の影響力を実感下さい。



二代川島甚兵衛《悲母観音綴織額》1895年 東京国立博物館所蔵
Image: TNM Image Archives

開館40周年特別展

「狩野芳崖、継がれる想い」

—— 悲母観音からはじまる物語 ——

会 期：2024年2月6日(火)～3月17日(日)

※会期中展示替えあり

※月曜日(祝日除く) 休館。

開館時間：9時30分～17時(入館は17時30分まで)

観覧料：一般 1,200円 (1,000円)

大学生 1,000円 (800円)

※()内は平日料金。18歳以下無料。

※下関市内在住65歳以上の方は上記の半額。

主催：下関市立美術館、毎日新聞社、TBSテレビ山口

特別協力：国立文化財機構文化財活用センター、東京国立博物館

助 成：川島織物文化館、一般財団法人自治総合センター

協 賛：やまぐち文化プログラム

関連催事に、現代作家によるアーティストトーク、
芳崖ミニ歌劇コンサート、美術講座、ギャラリートークなどを予定しています。



この展覧会は、文化財活用センター及び東京国立博物館の特別協力を得て実現しました。また宝くじの社会貢献広報事業として、宝くじの受託事業収入を財源として実施しているコミュニティ助成事業であり、宝くじの助成金を活用し実施予定です。

報告

■出前授業

7月3日(月)・7月4日(火)

昨年に引き続き、養治小学校に出前授業に行ってきました。1日目は2年生と「街の絵」を、2日目は3年生と「海の絵」を鑑賞しました。

「街の絵」では、壁一面の絵など、その迫りに歓声が上がりました。「海の絵」では、波模様や写真のようにリアルな表現に、興味が尽きない様子でした。

街や海の美術にも、「いつ、どこで描かれたか」によって、さまざまな表現があることを、しっかりと学んでもらえたようでした。また美術館にも「本物の絵」を見に来てもらえたらうれしいです。



「海の絵」の鑑賞

■下関市立美術館／東亜大学連携企画 映像作品制作プロジェクト

特別展「アニメーション美術の創造者 新・山本二三展」の関連催事として、東亜大学と連携した映像作品制作プロジェクトが進行中です。本プロジェクトは、東亜大学でコンピュータを学ぶ学生が、「心の中の懐かしい場所」をテーマに、映像作品を制作するものです。指導教員は同大学の文芝瑛先生です。

描いた風景には、アニメーション(動き)が加えられ、効果音も付けられます。

4月から始動したこちらの企画、完成作は展覧会初日に公開予定です。SNSにも制作の様子を公開しておりますので、ぜひご覧ください。



グループワークで作品の順番を決める様子

■夏休み子ども造形教室

「顔料づくり体験」 講師：原井輝明氏
7月29日(土)・7月30日(日)

貝がらなどの顔料の素を、ハンマーで叩き、すりつぶしてから、糊を加えて絵を描いたこちらの講座。自然ならではの色合いや、砂っぽい質感を活かした、味のある作品が完成しました。

「筆を使わずに絵を描こう」

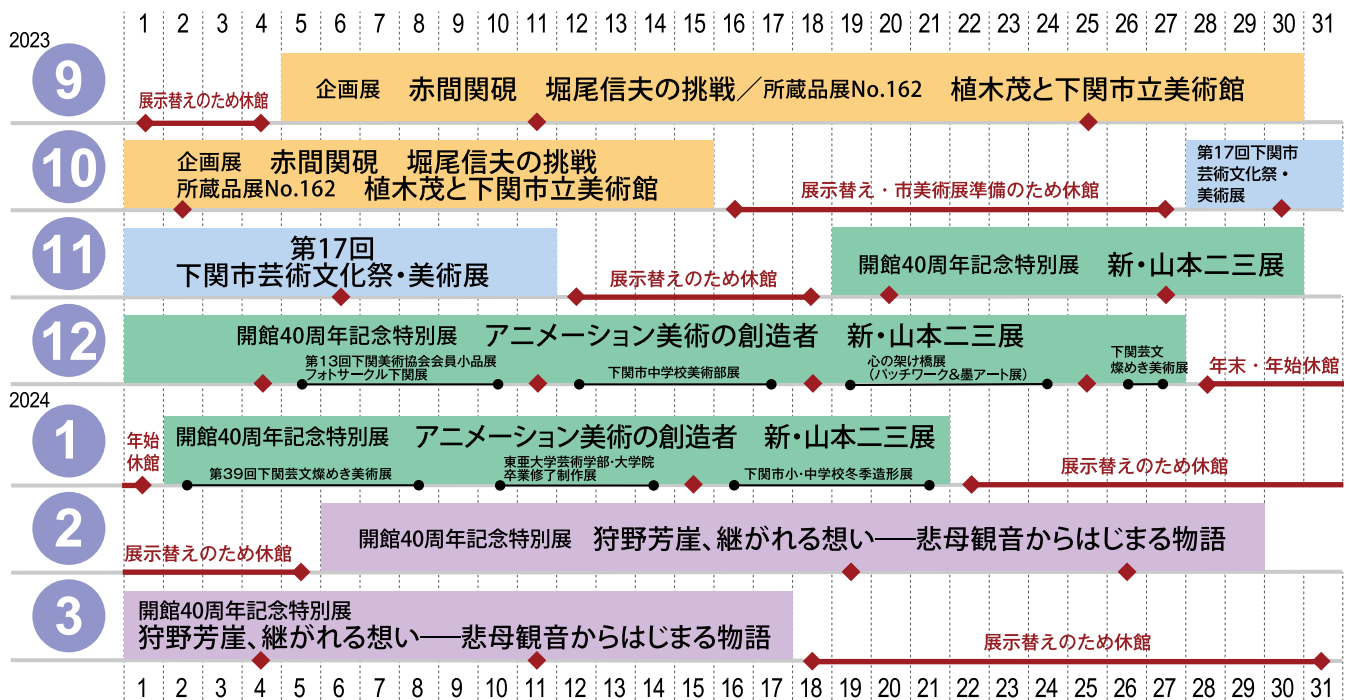
8月1日(火)・2日(水) 講師：村岡真樹氏
この講座では、木の枝やスポンジなどを用いて、アクリル絵具で好きなモチーフを描いていきました。さまざまな表現や、自由に絵を描くことの楽しさを学んでもらえたようです。(Y)



ローラーや葉っぱで描いた作品

下関市立美術館展覧会スケジュール(2023年9月～2024年3月)

会期・展覧会タイトルが変更になる場合があります。◆ 休館日



下関市立美術館NEWS



「潮流」139号／令和5年9月6日発行
 ■発行／下関市立美術館 〒752-0986下関市長府黒門東町1-1 TEL.083-245-4131
<https://www.city.shimonoseki.lg.jp/site/art/>
 ■印刷／株式会社ナカハラプリントックス